

う我は、決して自我ではない。若し自我であるならば、如來も亦実体となつてしまふであろう。そうではなくて、我如來を信ずる。いわく我とは、清沢満之が別の機会に、「自分は何ものも主張しようとするものではない。ただ如來の前にひれ伏して、自分の無智無能を懺悔するばかりである」と告白したような我であり、いわば碎かれた我である。だから、如來を信ずる心は、自我の破れた心、自己主張だけの人間の中にあって、本当の意味で開かれた心、公の心ということができる心である。この自我の碎かれた心は、しかしながらその時、この私をしかも今現に生かし、私たちを苦しめている大いなる力にはつきりとうなづいているのであり、この目覚め、このうなづきを信といふのである。そしてこのような自覚めこそ、純粹無難に「我信す」といわしめるもとのである。この光景が後に、「如來我となりて我を救う」と嚴密にいって當てられることとなつたのである。

信といふことは、容易ならぬ問題である。それを起すことも不容易でないと同時に、信を正しく了解することも亦容易ではない。その信について、私は清沢満之の信念に教えられて、ほほ以上のように了解するものである。それが又、御自身の信を「帰命無量寿如來、南無不可思議光」と表明せられた宗祖のお心に背くものでないことを、ひそかに思つておるものである。

## ヤスペースの世界史觀

大谷大学助教授 寺崎峻輔

個々の人間の相異を超えて、あらゆる人間に共通な一つの地盤を提供せんとの試みは、ヤスペースが終始心掛けてきた基本的態度であると言えるのであるが、ここではかかるヤスペースの基本的態度から、彼が世界史をどのように抱えているかについて見てゆきたいと思う。

先ずヤスペースに従い、彼の世界史の圖式から考察すると、彼は世界史を次のような四つの段階に区分する。それは一、先史時代、二、古代高度文化の時代、三、枢軸時代、四、科学的・技術的時代の四つである。

先ず第一段階の先史時代 (Vorgeschichte) とは、紀元前五千年以前であり、火が発見され、道具の使用がはじまり、言語が発生した時代である。それはプロメテウスの時代と呼ばれるものであるが、この頃にはじめて人間は人間たらしめられ、歴史の入口にはいりこんだと考えられる。

次に第二段階の古代高度文化の時代 (die alten Hochkulturen) とは、紀元前五千年から三千年の時代であり、エジプト、メソポタミア、インダス河流域、少し遅れては黄河の流域において高度の古代文化が発生した時代である。この時代にはじめて文字が作られ、歴史的記録がはじまるようになったが、このことによつて人々は愚昧な自意識から解放され、自己自身に目覚めるようになつたと考へられる。

次に第三段階の枢軸時代 (Achsenzeit) とは、紀元前八百年から二百年の時代であり、中国、印度、ペルシャ、パレスチナ、ギリシャにおいて、ほぼ時を同じくして世界史の基礎が築かれた時代である。それは諸々の精神的革命がおこなわれた時代であるが、この時代に至り人類ははじめて過去の因習を脱し、普遍的なものへの歩みをおこなうようになったと考えられる。

最後に第四段階の科学的・技術的時代 (das wissenschaftlich-technische Zeitalter) とは、中世末期以降西洋においてその基礎が築かれ、十八世紀以来広く進歩発展していくといふの科学と技術の時代である。それは先史時代が最初の道具の使用と火の発見による第一のプロメテウスの時代であるとするならば、新しい技術の発見による第二のプロメテウスの時代であると考えられる。

以上の四つがヤスペースの構想した世界史の図式であるが、これららの区分のうちでヤスペースが最も重要視するのは第三段階としての枢軸時代である。ヤスペースによれば、枢軸時代には世界史との関連において次のような特徴が認められる。

一、数千年の古代文化は、枢軸時代とともに終りを告げ、古代文化は枢軸時代のうちに融解されたということ。それ故に枢軸時代の文化は古代文化に較べ歴史的であり、自覺的な文化であるということ。

二、人類は枢軸時代に創造されたものによって今日まで生き続けているということ。すなわち人類の数々の精神的飛躍は枢軸時代によつて点火され、その復興によつて実現されているということ。

三、枢軸時代の影響は広範囲に及び、枢軸時代の展開に接した民族だけが歴史のなかに受け入れられたということ。それ故にこの展開にあずからなかつた民族は非歴史的な生き方を統け、自然民族として取り残されたということ。

四、枢軸時代の三つの世界は、互の間に歴史的に体験できるような共通の真理が認められるとのこと。すなわち中国、印度、西洋の三つの世界は相互の出会いによつて深い理解が可能であるということ。

ところでかかる枢軸時代の世界史的意義からして、ヤスペースは枢軸時代に世界史の指標を与えるのであるが、彼はこのことによつて從来の西洋中心の世界史から新しい時代の世界史を獲得せんと心掛ける。すなわち彼は歴史が愈々もつて世界的なものとなつつある現在、それに相応しい世界史をわれわれのものとして築かんとするのである。それは彼なりの問題意識から発したところの実存的な歴史観と考えられるが、然しかかる垂直的な歴史観は、われわれの存在と歴史とが常に表裏一体の関係にあるかぎり、われわれに一つの示唆を与えるものと言えるであろう。